

いい加減な夜食2

第一章 何気ない日々

深夜の厨房、谷本佳乃たにもじよしのは積み上げられた発泡スチロールの保冷箱を横目でちらりと見て、途方に暮れていた。中には魚介類が満載。

カツオ、アジ、イワシ、スズキ、マグロにアワビ……

どれも新鮮で、うっとりするほど澄んだきれいな目をしている。いや、アワビに目はないし、マグロもとくに頭部とおさらばしているのだが。実際、見るからに美味しそうな魚介類である。買ったときの値段を考えればコストパフォーマンスも花丸だ。

だからって雁首がんくび揃えて、しかもこんなに団体様でお越しいただいても困っちゃうよねえ……と佳乃はため息をつく。

なにせ、屋敷自体は大きいものの、実際にここに住んでいる人間は、主である原島財閥総裁、原島俊紀としきと使用人頭の宮野基みやの もとけい、そして夜食係改め原島俊紀私設秘書の谷本佳乃……もとい原島佳乃の三人だけ。そこにきて、この即日にも寿司屋を開店できそうな量の魚介類。まったく多いにもほどがある。

佳乃は、厨房の隅に積まれた発泡スチロールの箱にまたも目をやった。

彼女は先般、雇用契約解除届の下に婚姻届を貼り付けてサインさせるといふ複写詐欺に遭い、『両性の合意』なく俊紀と結婚させられたばかり。

とはいっても、その後、佳乃の誘拐未遂事件を経て、遅ればせながらも『両性の合意』に辿り着いたのだから、それはまあよしとしよう。問題はそのあとである。

誘拐未遂事件のあと、つかの間の自由を求めて一人遊園地で楽しんでいた佳乃は、スタイリスト門前望のタレコミと原島家の諜報担当である緊急対策班の人海戦術であつてなく俊紀に捕獲された翌日二人は、佳乃の希望により房総半島へとドライブに出かけた。お土産として魚を買って帰りましょう、と佳乃が提案したところまでは良かったが、その買い方がどうにもいただけない。

鮮度と価格を真剣に吟味するあまり、自分を放つて魚屋と熱心にやりとりする佳乃を許せなくなった俊紀は、佳乃が目移りしていたすべての魚を購入してしまったのだ。確かにそれによつて買ひ物は即座に終了し、佳乃の意識はちゃんと俺様俊紀に戻ったけれど……この大量の魚をどうする気だ、と佳乃は原島邸に着く前から悩みつばなしたつた。

おまけに俊紀は、二人きりで過ごした二日間の余韻のままに、佳乃を甘つたるくかまい続けている。佳乃とてそれが嬉しくないわけではないが、宮野の「はいはい、もうご存分に……」といわんばかりの弓形の目はさすがに直視できず、ちよつと夜食係に復帰してきます、と厨房に逃げ込んできたのだつた。

臆面というものが全くないのだな、あの男は……と思いながら、佳乃は鰹の刺身を温かいご飯の

上に並べた。本来なら、軽く醬油に浸して「づけ」にするべきなのだろうが、面倒くさいので上から醬油をかけ回す。やかんがしゅんしゅんいうほど沸かしたお湯で焙じ茶を入れ、刺身の上からたっぷり注いだ。熱い焙じ茶を浴びて鰹は瞬時に色を変えるが、中はしっかりレアのままだ。その鰹の食感がいい。ご飯と一緒に掻き込めば、予想以上に強い魚の出汁に、確かに鰹というのは鰹節になる身なのだと認識させられる。

熱いうちに食べてもらわねば……とお盆に載せたところで、宮野が厨房に入ってきた。

「佳乃様、俊紀様がお待ちかねですよ」

「えーつと……」

佳乃が口籠もつたのも無理はない。その待ちかねた主が宮野のあとから付いてきていたからだ。そしてさらにその後ろから、やれやれ……といった顔の山本巧、原島邸厨房付料理長である。

佳乃の誘拐騒ぎで心配をかけたお詫びも兼ねて宮野と山本を加えた四人で食事をし、さつきまで居間でお茶を飲んでいた。せつかく逃げ出してきたのに、何のことはない、場所こそ厨房に移つたもののほんの十分ほどで、結局また同じ状態に戻ってしまった。

「今、持っていこうと思ってたんですが……」

と言つた佳乃を、俊紀は、

「ここでもいい。出来たての方が美味いんだろう？」

と押しとどめ、厨房の小テーブルでお茶漬けを食べ始めた。

宮野と山本は、さつきあれば食べたばかりなのに佳乃が作る物は別腹なのか、とても言いたそ

うな顔で笑いを堪えている。

大ぶりの茶碗に軽く盛られた茶漬^{またた}けを瞬^{またた}く間に食べ終わり、俊紀は満足げに息を漏らした。

「美味かった。なんて料理だ？」

「まご茶^{まご}っていうんですよ。まあ、もともとは漁師^{まかな}の賄い食ですけど」

「そうか。生の鰹^{かつお}の茶漬^{またた}けなんて……と思ったが、呑んだあとにはぴったりだ」

俊紀は大いに気に入ったらしいが、佳乃にしてみれば、原島財閥総裁という超セレブ男が、お上品な鰹^{たかや}茶ならともかく鰹のお茶漬^{またた}けでこんなに喜んでいいのだろうか、と心配になる。これならまだ、なんちゃってリゾットの方が幾分ましなのではないか。

リゾットとは名ばかりのケチャップ味の野菜雑炊は、佳乃が初めて俊紀のために作った夜食だ。そのなんちゃってリゾットをいたく気に入った俊紀が、佳乃を夜食係として雇い入れたことからすべてが始まったわけだが……あれと残り物の刺身のお茶漬^{またた}けではどっちが上なのだろう。

うーん、やっぱりイタリアのマンマがこんなのリゾットじゃない！ と暴れてもあつちの方が……いや、でも残り物とはいってもこの鰹は今朝獲れたばかり……まあ、どっちにしてもセレブとはほど遠いな……と佳乃はまたため息をついた。

* * *

「で、どうするんだ、これ？」

そう問いかける俊紀に、茶漬^{またた}け茶碗を最後に厨房の片付けを終えた山本は、少し責めるような調子で答えた。

「ちよつと……買いすぎじゃありませんか？」

佳乃は佳乃で俊紀を恨めしげに見る。

「だからもうちよつと考えて買えばよかったんですよ。何でもいから全部買ってしまえ、なんて言うから……」

二人が買って帰った魚介類を、四人で食べられるだけ食べた。それでも発泡スチロールの箱に詰められた魚介類はまだ大量に残っている。

「まあ、冷凍できるものはするにしても、鰹はなあ……」

せっかく活きのいいのを買ってきたのにもったいない、と山本は眉を寄せる。

「宮野さん、このままいったら私たち一週間ぐらい鰹の煮付けばかりですよ」

なんて悩ましげな顔をした佳乃は、

「あーもう、誰かがーつと食べちゃってくれないかなあ……」

と、呟いてから気がついた。

いるじゃないか、ものすごく食べそうな体育会系、というよりも過激派武闘集団が……

「緊急対策班の人たちに食べてもらいましょう！」

ある意味、今回の騒動で一番被害を受けたのは彼らである。

行方のわからない佳乃を捜すために奔走^{ほんそう}させられ、徹夜で待機し、挙げ句の果てに何でもありま

せんでした、佳乃はネズミ王国でご満悦です、ときたまんだ。

俊紀が到着するまでの間、緊急対策班のメンバーも少しは遊園地の雰囲気を楽しめたものの、それだっけはしゃぎ回る佳乃を目の端に捉えながらのことだから、心から楽しめるわけがない。

しかも俊紀の到着と同時に全員が強制的に撤退させられたと聞いた。彼らは、いや面白かった、などと口々に言いながら戻ってきたらしいけれど、そんなもの当社比で、日頃遊びっ気が全くない生活をしている彼らが、ほんの一時見たスライドショーのようなものだろう。

「もうちょっと遊びたかった！　いつそ誰かにボスの車に細工させて、エンジンが掛からないようにしとくんだった！」

なんてとんでもない愚痴を漏らした人間までいたらしい。

もちろん、彼らが俊紀の不利益になるようなことをするはずがないのだが、その心中を思えばぼやきたくなるのも無理はない。

誘拐自体は佳乃の意志ではなかったが、翌朝以降の待機は明らかに佳乃のせいである。佳乃が真っ直ぐ原島邸に戻れば、あんなことにはならなかったのだ。

そもそも彼らは日頃表に出ることもなく、ただひたすら俊紀と原島財閥のために暗い部分を引き受けてくれている。そんな彼らをたまには労うべきだろう、と佳乃は主張した。それで魚介類も片付くなら一石二鳥だと……

「いや……でも……あいつらは……」

佳乃の話を聞いて山本が口籠もる。山本のためらいを見て取った宮野が、苦笑しながら言った。

「佳乃様、緊急対策班の面々は、おおよそ山本の料理と相容れません」

万能グルメシェフ山本の料理が口に合わない人間がいるなんて思えない。佳乃のなんちゃって料理をこよなく気に入っている俊紀にしたって、山本の腕はちゃんと認めている。佳乃は怪訝な顔で宮野に聞き返した。

「何ですか？　美味しいし、レパートリーだってすごく豊富じゃないですか」

佳乃の問いに宮野はやれやれ、と言わんばかりに答える。

「彼らの基準は、そういうところにはないのです」
そういうところというのは、どういうところだ？　料理に求めるものに味以外があるなんて思えない。コストパフォーマンスが問題になることもあるが、原島邸で提供される料理に支払いが要求

されることなどないのだから、美味上等ではないか……と佳乃は思う。
その佳乃の考えを読んだように山本が言った。

「あいつら、とにかく食うんだよ。半端なく！」

佳乃に対する敬語が、思わず入籍以前のタメ口に戻るぐらい嫌そうだった。

山本が作り上げる優美な料理の数々を、鑑賞はおろか味わうことすらなく吞み下すフードファイター軍団。彼らは原島邸厨房の巨大冷蔵庫を空にする勢いで食べまくった挙げ句、

「こじやれてなくていいから、もっと腹に溜まるものを食わせろ!!」

なんて、騒ぎ出すらしい。

「奴らには、これまで積み上げてきた上流スキルが全然通用しないんだよ。もうな……B級グルメ

どころかCとかDラインまでいつちまってる」

女の胸ならともかく、食の嗜好でCとかDとか勘弁してくれ、と山本はぼやく。

それを聞いて、むしろ佳乃は嬉しくなった。

「うってつけだ……」

その表情を見た宮野と山本は、佳乃のなんちゃって料理を思い出す。

佳乃の料理は、確かにあの連中の嗜好に合いそうだ。内容もそうだが、その提供スピードはきつと彼らを満足させることだろう。山本と宮野はお互いの顔を見て小さく頷き合った。

「それでは、佳乃様がお作りになられるのがよろしいでしょう」

佳乃が献立を作り、山本がフォローすればまず間違いないだろう。そう思っ宮野が助言するが、その頃には佳乃は全然違う方向に思考を飛ばしていた。

「というよりも、庭でばーんと火を熾こして、なんでもかんでも焼いちゃったらどうでしょう？」

「ここでバーベキューをする気か！」

大量に買い込ませたのは自分だという自責の念から、それまで辛うじて黙って三人のやり取りを聞いていた俊紀も思わずぎょっとして口を挟む。

優美なバラが生い茂る香り高きあのガーデンで、火を熾こしてバーベキュー……

そこに群がる緊急対策班の猛者ども。当然素面で満足できるはずもなく、アルコールがふんだんに入ってる乱痴気騒ぎ……地獄絵図が思い浮かび、俊紀は目眩がしそうだった。

「いいじゃないですか。これだけ広ければ、ご近所からも文句は出ないでしょ？」

庭先バーベキューは庶民の憧れではあるが、いかんせん日本の狭い敷地では少々難しい。ちよつと火を熾こせば煙が流れ、会話を楽しめば声が漏れ、周辺からたちまち文句が飛んでくる。

その点、原島邸なら問題ない。庭の真ん中で火を熾こしても、匂いも煙も敷地の外に出る前に拡散して消えるだろうし、声だつて外に届きはしない。

「ねーいい考えだと思いませんか？ 網に載つけてばーっと焼いちゃって、鰹だつてあぶって叩きにしてお肉とかも……うわー楽しそう!!」

困惑する三人の男を尻目に、佳乃は一人で盛り上がっている。そればかりか、窓まで走っていつて夜の闇に目を凝らし、どのあたりがいいかなんて場所の検討まで始めた。

「……俊紀様……」

宮野が気の毒そうに俊紀を見た。

「あれは多分……」

止められないですよ、と山本も言外に言う。そもそもどう考えても、俊紀があんなに楽しそうにしている佳乃を止められるはずがないのだ。他の人間が言い出したら問答無用で切り捨てられる案でも、相手が目に入れても痛くない佳乃とあっては抵抗力ゼロだ。

「庭師に連絡してくれ……」

案の定、俊紀は呻きながらも宮野に指示を出す。

「せめて、あの連中が暴れても一番被害の少なそうな場所を選ばせろ」

かくして原島財閥緊急対策班慰労バーベキュー大会の開催が決定した。

「材料、どれぐらいいると思います？」

翌朝、佳乃は厨房の小さなテーブルにノートを広げていた。向かいには依然として浮かない顔の山本。そして脇には、人数を考えて急遽^{きゅうきょ}呼び出された原島邸のもう一人の料理人松木^{まつぎ}が立っている。松木はまだ若いし、山本と違って上流家庭の食事ばかりを作ってきたわけではないので、少し楽しげである。

「とんでもないこと思いつきますね、佳乃様」

日頃厳しく自分に指示する山本が弱り切っている姿を見るのが楽しいと言わんばかりの松木。当然山本は面白くない。

「ほんとに、前代未聞だよ。原島邸でバーベキューなんて」

「でも、欧米じゃ普通じゃないですか。どうかすると朝から一日かけて子牛の丸焼きとか」

松木はどこかの旅行クイズ番組で見た映像を思い浮かべる。巨大な串を通してぐるぐる回される哀れな子牛……。佳乃の目がきらりと光る。

「それ……美味しそう！」

余計なこと言うな、と山本は慌てて松木をたしなめ、佳乃を止めに入った。

「勘弁してくれ!! バーベキューってだけでも相当なのに、この上牛の丸焼きとか言い出したら、

いくら俊紀様でもリミッター振り切れるぞ」

「ああ、やっぱりそうですか……。でも、子豚ぐらいなら？」

「だめだって!!」

山本はもうすっかり敬語を諦めている。佳乃が原島邸に夜食係として入ってきた頃と同じ口調で交わされる会話。そのやりとりがさらに佳乃を嬉しくさせる。

宮野は元からだから仕方ないにしても、俊紀と入籍してからは山本にまで佳乃様なんてかしこまって呼ばれるようになってしまい、不本意だったのだ。

「うーんしょうがない、肉系は諦めましょう……。じゃマグロの頭は？」

あの巨大な魚の頭に群がる緊急対策班の猛者^{もさ}たち……。最後は誰にかぶらせようと追いかけてこが始まって……。だめだ! 似合いすぎる!

自分の想像に爆笑しながらも、山本は佳乃をたしなめる。

「しやれにならない!!」

「つまらないの」

口をとがらせて膨れる佳乃は、子どものようにあどけない。

ああこんな顔、俊紀様が見たらまた大変だ……。なんて山本は苦笑いをする。もういい、牛でも馬でも丸ごと食え、とばかりに目尻を下げることだろう。

俊紀は、幼い頃から過剰な期待をかけられ、そしてその期待に応え続けてきた。

あまりにも有能であることは、かえって不幸なのかもしれないと山本が思うほどに、俊紀はあらゆることをそつなくこなした。きつと、疲れたことも投げやりになったこともあっただろうに、それを表に出すことすらせずに走り続けた。

主の性格と能力を考えれば、おそらくそのまま走り続けることは不可能ではなかっただろう。けれど主は成長とともに、人としての幸福とはどんどん離れたところに行ってしまった。行動にも、言葉にも、そして笑顔にすらシニカルなものをふんだんに含み、やがて彼本来の姿はほとんど見えなくなってしまった。

そんな俊紀の日常を根底からひっくり返した佳乃。本人にしてみれば、そんな気など毛頭なかっただろう。それどころか、できれば関わりたくないという佳乃の思いは雇用一日目からあまりにも明白で――

彼女は主との接触を避けるためにあの手この手を使っていた。主に近付くために手管を使う女は腐るほど見てきたが、その逆など見たことがなかった山本は興味を引かれた。つついどうなることかと見守っていたら、そのまま五年も観察し続ける羽目になったわけだ。

その間も、時間はかかっているが、当然主の望むところに堕ちるはずだと思っていた。けれど、性格を丸ごと裏返されたような今の俊紀を見ると、もしかしたら負けたのは主の方だったのかもしれないと思う。

いや……ちがうな、とさらに山本は考える。

主はそうやって裏返されてしまったかったのかもしれない。原島財閥総裁としての責務に人間ら

しさを奪われそうになっていた俊紀に、佳乃は孤軍奮闘以外の戦い方を教えた。佳乃自身も主の求めるままに自らを磨き上げ、見事なパートナーとなった。

その愛すべきパートナーが少々常道を逸^いしていても、主は気にもとめないはずだ。庭先バーベキューの一つや二つなんだというのだろう。緊急対策班が大暴れをしたところで、それで佳乃が喜ぶのならば、主もまた満足に違いなかった。

「牛一頭は無理にしても、ちよつと大きめのローストビーフでも焼いてみようか？」

とにかく大きなものを焼きたくてしかたない、といった顔をしている佳乃に、山本は温^{ぬる}い笑顔を向けた。

山本は、このイベントの目的は緊急対策班の慰労をかねた魚介類の始末だったのでは？ と突っ込みそうになる。

第一、ローストビーフでは野性味に欠けるだろう。パーティーで食べ飽きている佳乃が、それで満足するわけがない。それにしても、二人して本来の目的を忘れすぎである。

しかも、山本が原島邸の料理長として最大限の譲歩をしているというのに、佳乃はさらにとんでもないことを言った。

「それならケバブがいい」

それはまたずいぶんと庶民的なものを……と山本が返す間もなく、後ろに来た人物が口を開いた。

「ケバブが食べたいのか？」

いきなり声をかけられた佳乃が飛び上がる。

「うわ……いつの間に！」

ついさっきまで、庭師と話してたはず……なんてもう誰も言わない。佳乃がいるところを敏感にかぎつけてやってくる主にも、もう慣れた。

「庭の方は大丈夫そうだ。でかい炬も手配済み。連中にも招集をかけた」

「皆さん、来られそうですか？」

「あいつらの都合なんて知るか。呼んだんだから来るだろう」

と、至って無頓着かつ本来の目的を見失った発言をする主。佳乃の「ケバブ食べたい」という欲求だけに対応している。

「美味しいんですよ、ケバブ。昔よく食べました」

恐らく学生時代か、あるいはもつと前に海外にいたときに食べたのだろう。俊紀は、懐かしむような表情をする佳乃を面白くなさそうに見たあと、おもむろに言った。

「山本」

「なんででしょう？」

「作れ」

「なにをですか？」

「ケバブだ」

無理です！ とその場にいた全員が思った。佳乃本人すらそう思った。

どう考えてもあの巨大なスズメ蜂の巣のような肉のかたまりを、一般個人宅の厨房で焼き上げるのは不可能だ。たとえ原島邸といえど、同様である。専用のヒーターだって必要なのだ。

「俊紀様、それはちよつと無理な注文ではないかと……。設備ありませんし」

後ろから付いてきていた宮野がいつもながらに冷静な指摘をする。佳乃はほつとすると同時に、ケバブというものを知っている宮野に驚く。宮野の年代でケバブを知っている者が何人いるだろう。

「一般の台所でできるのは、せいぜいフライパンで炒めてそれらしい味つけにしたものぐらいです。でも佳乃様が召し上がりたいのはそういうものではないでしょう？」

ヒーターの前でぐるぐる回りながら焼かれていく巨大な肉の固まり。その焦げた表面を削り取って野菜とともに袋状のパンに詰め込み、特製ソースとともにかぶりつく。甘みと辛みは白と茶色のソースの配分で加減する。佳乃が好きなのは茶色たっぷり、舌に浸みるぐらいスパイシーなら言うことなし。

それが佳乃の食べたがっているドナーケバブである。そんなものを家で作れるはずがない。

「じゃあ店ごと買い上げろ！」

「……病気だ」

そんな佳乃の一言に、山本はぷつと吹き出す。

確かに病気かもしれない。そこまでして佳乃の欲求を満たそうとするなんて……

まあ主^{あるし}にしてみれば、現在^{いま}が佳乃の過去の思い出に劣るなんて、それがどんなに些^{ささい}細なことでも許せないのだろう。

気持ちにはわからないでもないが、いささか度が過ぎる。

「買う必要はないでしょう。移動販売車を一日借り切りましょう」

宮野が苦笑いしながらそう言うのと、

「まあ、ケバブなら彼らも好きそうだし、一台借りれば相当腹も満たされるでしょう」

と松木も賛同した。かくして、原島財閥資産にケバブ屋が算入されることは未然に防がれた。

「じゃあ、後は頼む」

俊紀は満足げに頷ぎ、佳乃を連れて書斎に戻っていった。恐らく、急に決まったガーデンパーティーの時間を空けるために、仕事を繰り上げて済ませるつもりなのだろう。

主夫婦の背中を見送った山本は、振り返って松木に訊いた。

「ケバブ屋の知り合い、いるか？」

「いるわけじゃないですか」

「だよな……どこから連れてくるんだよ、ケバブ屋なんて」

「ケバブ・ドット・コム？」

「あるか！」

「調べてみなきゃわかんないじゃないですか」

そして山本と松木は顔を寄せ合って、パソコンで検索を始めた。

* * *

緊急対策班慰労パーティーはその日の夕方から開催された。

一式揃えてレンタルさせてくれ、と言われたケバブ屋はさすがに今日の今日では無理だと難色を示したが、そこは原島財閥の威光でもって無理矢理手配を急がせ、何とか午後までに資材と食材一式を届けてもらった。

庭師が丹精している芝生の上に、あの街で見かける移動販売車が乗り入れることになるのかと山本は心配したが、聞けばちゃんとイベント用のレンタル機器があるらしい。

「助かった……とりあえず庭師に恨まれずに済む……」

と大きく息を吐いた山本に、松木が笑いながら言葉を返す。

「そういえば、最近縁日の屋台とかでも見かけますね」

「なら、もっと早く佳乃様に教えておいては良かったよ。そうすればこんな騒ぎにならなかったのに。ケバブでもトルコアイスでも、さっさと行って食べてくれば……」

話していた山本は、宮野のいかにも何か言いたそうな視線に出会って言葉を切った。

「無理だよな……」

「ですな……」

どこにケバブ屋があろうとも、佳乃が一人で行けるはずがない。

原島邸に来てからの五年間で、佳乃が仕事以外で一人で外出したことなど数えるほどしかないし、その数少ない外出も本当に短時間のことだった。とにかく俊紀は佳乃を一人で出かせさせたくないのだ。

佳乃がケバブ屋に行くと言えば、必ず自分が一緒に行くと言うだろう。だが、佳乃のことだから、そんなことに忙しい俊紀の時間を割くぐらいなら……と、我慢してしまうに違いない。

結局、その我慢が限界に達して、突発的に脱走し、先般の誘拐騒ぎへと発展したわけだ。最終的に二人は納まるべきところに納まったから、それはそれでよかった。だが、山本から見れば、今なお、佳乃は俊紀に遠慮しているように見える。

今回のパーティーにしても、「俊紀が買いきつた海産物」の処理でなければ、また緊急対策班の慰労という名目がなければ、佳乃がこんなふうに自分の欲求を紛れ込ませることはなかったのではないか。それがたとえケバブという原島財閥からすれば非常にささやかな欲求にしても……

「もうちよつとわがままでもいいんだと思いますけどね……佳乃様は」

松木はそんな言葉とともにため息をついた。

「姫さんあなたは天使だ！ 俺は一生あなたについてくぜ!!」

緊急対策班班長の^{おおさわのふゆき}大澤伸行は来るなり佳乃をハグしようとした。当然、^{あるじ}主の氷のような視線に射

抜かれて渋々断念したが、親愛の情を表明することは惜しなかった。

原島財閥のために影となつて働き続けることに、決して不満があるわけではない。むしろ、人生裏街道まっしぐらで人に言えないような経験を積んできた緊急対策班の面々は、日本という国の中にあつてはおよそ得難い「経験を生かせる」仕事を与えてくれる俊紀に常に感謝していた。

原島家と彼らの間にはお互いの利益尊重に基づいた共存関係がちゃんと成立していたし、原島家の後ろ暗い部分を一手に引き受けている緊急対策班は他では到底考えられないほどの厚遇を得ている。

それでも、「慰労パーティー」などという形で表立つて感謝を示されたことはなかった。たとえその志^{きざし}とところが大規模な残飯処理だったとしても、そこで緊急対策班という存在を思い出し出してくれたことが嬉しかった。

自分たちに食べさせるために、山本や松木を手伝って、せっせとあれこれ庭に運ぶ佳乃を見ていたら、やっぱりこれは一度ぐらいハグが必要だ、なんて思ってしまう。

そんな大澤の気配を敏感に察知した俊紀が、警告を発した。

「大澤、佳乃に近付くな」

「ちよつとぐらい、いいじゃねえか」

「やかましい。いい加減にしないと強制退場させるぞ」

「うわーボス、それはあまりにも横暴だぜ。せつかく姫さんが呼んでくれたのに」

「佳乃じゃない、わ・た・しが呼んだんだ」

「あーはいはい、ボ・ス・が、魚屋とよろしくする姫さんが面白くなって独断で買い物を打ち切った挙げ句、こういうことになったんだったな！」

「おーさわー!!」

「おーこわ」

傍若無人な緊急対策班班長と俺様総裁の掛け合い漫才はバーベキュー大会の見事な余興となり、参加者の笑いを呼ぶ。

「何である人といると、社長はああなんですか？」

佳乃は俊紀と大澤のじゃれ合いを見ながら、宮野に訊いた。

俊紀は常に冷静沈着で、どんな相手に対しても失礼でこそないがビジネスライクとしか言いようがない態度で接する。部下に対してもそれは同様で、指示も命令もおおよそ感情から遠いところにある。それなのに、こと緊急対策班相手となった途端、まるで学生の体育会系部員同士のようなやり取りになってしまうのだ。特に班長の大澤とは年齢が同じということもあつてか、その傾向が顕著だった。

「幼なじみなんですよ。俊紀様と大澤は」

「え？」

幼なじみ……ということは、やっぱりあの人にも幼い頃があつたのか……と佳乃はつい失礼なことを考えた。あの難しい顔のまんま、あるいは、どんな女性でもたらし込める不敵かつフェロモン

満載の笑顔のまんま生まれてきたと言われても、そうか……と納得しそうだ。

そんなことあるわけがないでしょう、それはもう天真爛漫なお子様でしたよ、俊紀様は、と宮野に言われて、逆に驚いた。

「天真爛漫な子どもが、どこでどう間違つたらああなるんですか？」

思わず突っ込む佳乃に、宮野は苦笑した。

……まあ、そうなのかもしれない。確かに主は人生あるじの途中で何かを間違えかけた。責任を全うすることに熱中するあまり、自分を幸せにするという、人間として一番大切なことを忘れた。だが、その間違いはすでに佳乃が正したのだからなんの問題もなかった。

宮野の目から見ても、今の俊紀は確かに幸せなのだと感じさせる雰囲気を持っていた。それは紛れもなく佳乃という存在が与えたものだ。

大澤とのやり取りに、俊紀はいつになく楽しそうに笑っている。そういえばあの頃もこんな風に笑っていた……と宮野は随分昔になってしまった俊紀の子ども時代を思い出す。

「俊紀様と大澤は、しょっちゅうこの原島邸の庭で遊び回っていました。木に登って落ちたり、堀をよじ登って落ちたり、落とし穴を掘ったことを忘れて自分で落ちたり……」

「落ちっぱなしじゃないですか！」

「受け身は完璧でしたねえ、二人とも……」

「そういう問題じゃ……」

あきれ顔の佳乃に、宮野は思い出し笑いを滲ませつつ語る。

「幼稚園の入園式で隣り合わせだったそうです。それで、初日から大げんかをなさって……」

ああ、それならわかる、と佳乃は思った。

俺様俊紀は、天真爛漫と言われながらも、きつと幼い頃から俺様要素をたっぷり持っていたはずだ。同じ年でちよつと気に障る相手となら、あつという間にけんかを始めたに違いない。

「そのときは、俊紀様が優勢だったようです。もちろん、先生に止められるまでは、ですが」

「まあ、そうでしょう」

「でも、大澤の方も相当負けん気が強かったらしくて……」

帰宅してから、原島邸に乗り込んだできたのだという。

歩いて五分のところに住んでいた大澤は、俊紀が原島邸の坊ちゃんだということを知って、その巨大な屋敷の門前で叫んだ。

『はらしまとしきー!! さつきのけつちやくをつけるぞー! いざんじようにしょうぶしろー!!』

「うわあ、面白い」

首に風呂敷を巻き付けて、片手に木の棒を持ち、仁王立ちで叫ぶ幼稚園児。

その姿をたまたま車で帰宅した孝史が見つけ、面白がって屋敷に入れた。孝史立ち会いの下、「いざんじようにしょうぶ」が始まり、力尽きるまで縄^もれ合った二人は、こういう場合のお約束で最後は友達になった。それから小学校を卒業するまで、二人はずつと親友だった。

「それからあとは？」

「大澤の家が引越してしまい、それきりになりました」

「ああ……なるほど」

ふたりは別々の人生を歩むことになり、再会したのは大人になってからだった。

「大澤の転居は、どうやら夜逃げだったらしくて……」

何が原因だったかはわからない。ただ、大澤の家庭はその後転落の一途を辿り、大澤自身も道を外した。悪い仲間に誘われ、ちゃんな悪事に手を染めて、やくざに目を付けられた。それから逃れるために海外に行き、その後は裏街道一直線。俊紀と再会したときにはすっかり暗い目の男になっていた。

「再会って……どこで？」

「存じません。俊紀様も詳しくはおっしゃいませんが、海外だったと聞いています」

幼なじみのあまりにもずさんだ姿に驚いた俊紀は、このままでは命を落としかねないと大澤を無理矢理日本に連れ戻し、緊急対策班に入れたのだという。

ずつと裏街道しか歩いてこなかったのならば、いっそそれを逆手^{さか}に取ればいい。裏街道を歩く途中で身につけた技能だってあるはずだ。それを原島のために生かしてくれないか。

自分でも人生のやりように困っていたに違いない大澤は、俊紀にそう言われて、存外素直に従ったらしい。相手が子どもの頃の自分しか知らない俊紀だったのが幸いしたのかもしれない。

そして大澤は原島邸の緊急対策班に入り、それから数年後、班長という地位についた。

「大澤の俊紀様への感謝の念と忠誠心は比類ないと思います。それでも、基本的に二人の関係は、

幼稚園初日にとつみあいをした日から変わっていません。だからこそ、あのお二人はああなのです」

宮野は、依然として掛け合い漫才をしている俊紀と大澤を見ながら言った。

「なるほど、よくわかりました」

再会した幼なじみが常にそばにいて、自分のために働いてくれるというのはとてもいい、と佳乃は思う。

佳乃は幼い頃から世界各国を転々とし、幼なじみといえば田宮朋香^{たみやともか}ただ一人。しかもその朋香とも原島邸に入ってからほとんど会えていない。そんな自分から見れば、それはひどく羨ましいことだった。

だが次の瞬間、後ろからかけられた声に佳乃は仰天した。

「佳乃！」

この原島邸で自分の名をこんな風と呼ぶ人間は俊紀以外にいないはず。だが、その声はどう聞いても女性のものだ。慌てて振り向くと、そこにいたのはなんと今し方思いを馳^はせたばかりの田宮朋香だった。

佳乃は朋香に抱きついて歓声を上げた。

「朋香！　なんでここに!？」

「うん。すぐたくさん魚があつて困ってるから食べに来ないか……って」

「誰が？」

「原島財閥総裁ご本人」

「えー！　み、宮野さんじゃなくて!？」

あり得ない情報に、佳乃は言葉が続けられなくなった。そもそも主^{あるじ}が親睦会あるいは仕事以外でこの原島邸に客を入れることなど滅多にない。しかもそれが女性であればなおさらである。それなのに、自ら電話までして誘い入れるとは……

混乱して言葉を失っている佳乃に、朋香は笑って説明してくれた。

「この前はホテルから追い返すようなことをして申し訳なかった、ついてはうちのむくつけき連中と一緒に申し訳ないが、ちよつとした慰労会を考えているから時間の都合がつけば顔を出してもらえないか……って。そしたらきつと佳乃も喜ぶだろう……って」

「ああ……そういうこと……」

以前にも一度、佳乃は俊紀から逃げ出したことがあった。そのとき下町の居酒屋経由でビジネスホテルに潜り込んだ佳乃を、俊紀はあっけなく見つけ出した。そして、佳乃と一緒にいてくれた朋香は、すぐさま自宅に帰らされた。彼女とはそれっきりになつていたのだが、緊急対策班の慰労会をすると言い出したとき、俊紀はそのことを思い出したのだろう。

そして、わざわざ自分で朋香に電話をかけて呼んでくれたのだ。宮野や佳乃がかけたのでは朋香が俊紀に気兼ねするのではないかと気にして……

「ものすごい俺様一辺倒かと思つたら、案外細やかだよね、あの人」

「そうだよ……そうじゃなきゃ……」

「惚れたりしないよね？」

「朋香……」

朋香は、ほんとによかったね……と佳乃の頭をこしこしと撫で、二人の成り行きを喜んでくれた。そして佳乃は、招待してくれた方にご挨拶しないと……という朋香をつれて俊紀のところに行った。

「本日はお招きに預かりまして」

「いや。急にお呼びだてて申し訳なかった。仕事の方は支障なかったかな？」

「同僚に頼んでシフトを替えてもらいました。こういうところはシフト制勤務の強みですよ」

「なるほど、それはよかった。たくさん食べて、在庫減らしに協力願いたい」

「かしこまりました」

ここに朋香がいて、しかも彼とこんな風に普通に話をしているなんて現実とは思えない……

佳乃がそんなことを考えてぼんやりしている間に、二人の挨拶は終わったらしく、じゃあごゆっくり……と言って俊紀はまた緊急対策班が騒いでいる方に戻っていった。きっと、朋香とゆっくり話ができるように気を利かせてくれたのだろう。

「うーん……いい男。スーツ姿もいいけど、カジュアルもいいわね……」

朋香はいかにもデパート店員らしいチェックを入れたあと、一瞬にして不安そうな表情になった佳乃を盛大に笑った。

「鑑賞してるだけでしょ。取ったりしないって。第一、あの人あんた以外全然目に入っていないよね。この美しい私が目の前にいるのに、注意は全部あんたにいった！」

「え……そう？」

「そうなの。客商売してればわかるわよ、相手がどのお品をお気に入りかぐらい。それにね……あの人が私をここに呼んだのはきつと、あんたに外に出ていかれるよりは、私をここに呼んで会わせた方が余計なものを見ないって考えたからだよ。私に会いたいなら私だけを連れてきた方がいい、ここならよその男を連れてきたりできないもんね、あー知能犯！ で、すつごくやきもち焼き！」

朋香はそう言うってからからと笑った。

「よかったよ。あんたに鳥居^{とり}さんを会わせたかどで打ち首にされなくて」

そういえばそうだ……でもまあ、きつと彼はあの一件があったからこそ今があるのだと無理矢理納得したのだろう。鳥居道広^{みちひろ}はある意味ひどく効果のある起爆剤だった。いずれにしても、俊紀が佳乃の親友である朋香に危害を加えるとは思えなかったが。

「じゃあまあそういうことで、在庫処分に協力しましょうか！」

そしてふたりは笑いながら、原島邸の庭に設えられた大きなバーベキュー用の炉の方に歩いていった。

炉の上では、各種の魚が盛大に焼かれ、案の定肉やら野菜やらも追加されている。松木が首を傾げたローストビーフもかなりの大きさのものが焼かれていた。

「わあ……たくさんあるって言ってたけど、これは本当にすごいわね」

「買いすぎちゃったんだよ。で、この企画」

「なるほど……でも、この勢いならまあ大丈夫そうだね」

焼ける端から、いやほとんどレアなままでも『新鮮だから』を合言葉にどんどん口の中に放り込む緊急対策班員たち。彼らを見ながら、朋香は呆れたように言った。

「あの人たち、ある意味体が資本だから食べることも仕事のうちなんだよ、きつと」

と、佳乃は精一杯の弁護を試みるが、どう見ても今の彼らに「仕事」という概念はなさそうである。我ながら無理があるな……と思う佳乃。とどのつまり、仕事であろうが慰労であろうが目前から魚介類が消えさすればいいのだ、と気を取り直したところで、佳乃は山本に声をかけられた。

「ローストビーフ焼けたんだけどな……」

「けど、なんですか？」

「ソースがないのが気に入らない。何か見繕ってくるかな……」

「今からですか？ もうお肉焼けているのに？」

佳乃と違って、山本は本格派グルメシェフである。彼が今からソースを……なんて言い出したら何時間かかるかわかったものではない。佳乃は慌てて止めに入った。

「ソースなんてなくていいですよ。そこらの醬油でもぶっかけちゃえば……」

「いや、でも……」

「山本さん……」

それじゃあこの美味しそうなローストビーフはいつ私の口に入るの？ とがつくりうなだれそうになったところで、朋香が意外なことを言った。

「あのさ、だったらこれ使えないかな？」

そう言いながら取り出したのは、粉末スープのようなパッケージだった。表には、焼いた肉にソースをかけたイラストが入っている。

「フィックスのグレイビーソースだ！」

「フィックス？ 格安航空券か？」

佳乃の声に反応したのは、いつの間に現れたのか、相変わらず神出鬼没の主だった。一方、山本は、早くもパッケージの裏に書かれている作り方の説明書きに一心に見入っている。

「じゃなくて……インスタント食品です。粉末に水や牛乳を加えて作るスープであるじゃないですか。あれって海外ではフィックスって呼ばれているんです」

「ああ……カップスープの鍋版みたいなやつか……」

「逆ですよ。鍋版がもつと簡単になったのがカップスープ。もともとはあの類はみんな粉末だったでしょ？ ああいうやつバリエーションがすごいですよ、海外って」

グラタンや、焼いただけの肉や魚にかけるちよつと凝った感じのソースの粉末……そういうものが海外ではたくさん売られている。それこそ夫婦共働きが一般的な国ではバリエーションが豊富に用意されていて、女性も男性もそれを使って簡単に料理をしている。

休日にとめ買いし、平日は冷凍した肉や魚をレンジで解凍して、それらのソースをかけて食べる、といったことが普通だ。

佳乃は海外にいるときにその種類の豊富さに驚いて、これだけあれば毎日色々な味を楽しめるなあ……と感心したことがある。

そして同時に、日本にこういう商品が少ないことをとても残念に思っていた。

「これなら三分でソースが出来上がるな……ちよっと作ってみていいか？」

山本はもうどんなものか試してみたくて仕方がないらしい。さすがグルメシェフ、インスタントといえども食分野の探求には余念がない。朋香は、どうぞどうぞと手で合図をしたあと、情けなさそうに佳乃に言った。

「あれ、もらい物なんだけど、作り方がわかんないのよ」

「え？　だつて裏に書いてあるじゃない？」

と、言った途端、佳乃は軽く頭を叩かれた。

「誰でもみんな、ドイツ語とか英語とかが堪能だと思わないでよね！　あの裏にびっしり書いてあるの、ぜーんぶ横文字よ！　私に読めるわけじゃないじゃないの！」

英語ぐらい読めよ……と思ったが、口には出さなかった。さっきは手のひらで叩かれたが、次はきつとげんこつが来るにちがいない。そんな危ない橋を渡りたくない佳乃は、話題を微妙にずらす。

「で、何でそんなもの持つてるの？」

「あれさ、瑞穂みずほさんがお土産につてくれたんだ」

「あー、あのドイツで商社に勤めてるつて人？」

いつだったか、朋香の誘いで行った居酒屋で、一緒に呑んだ女性たちの中に、ドイツから一時帰国してきているという人間がいた。そういえば彼女はミュンヘンに住んでいると言っていた。なるほど、お土産としてフィックスを持ち帰ったのか……さすがだな……と佳乃は感心した。

「インスタント食品が土産か？」

俊紀が訝いぶかしげに佳乃を見た。お土産でインスタント食品をもらつて嬉しいのだろうか……という顔をしている。そんな俊紀に佳乃は説明した。

「日本にはこういう粉末のあんまりないですから、珍しいじゃないですか。お土産の第一条件でしょ？」

「まあ、そう言われればそうか……珍しくて、便利で、味は？」

と俊紀が言ったところで、山本が鍋を持つてやつてきた。もうできたのか……と驚く俊紀に、山本はスライスしたローストビーフにグレイビーソースをたっぷりかけて差し出す。

「食べてみてください。インスタントにしてはかなりいい感じですよ」

俊紀を始め、佳乃、朋香や宮野、松木もその味を確かめるようにゆっくりとローストビーフを味わった。

「これ、下手な料理店が出るインチキ臭いソースよりずっと美味しいよ」

ローストビーフ自体の上等さはさておいて、と言いながら朋香は目を見張る。普段からインチキ臭くない正統派のソースを食べ慣れている原島邸の面々も、インスタントでこれなら相当なレベルであることを認めた。

「でしょ？　これがあつという間にできちゃうんだから、すごいよね。昔よく、うちのお母さんも使つてた……」

途中で口を閉じ、佳乃は考え込んだ。

珍しくて、簡単で、しかも美味しい……これって……

「佳乃、どうした？」

ローストビーフの皿を持ったまま考え込んでいる佳乃を見て、どこか具合でも悪いのか、と俊紀が声をかける。

佳乃はもう一度皿上のローストビーフとソースを見て、それから俊紀に言った。

「これ……日本で作れませんか？」

「ローストビーフをか？」

「じゃなくて、ソースの方。フィックスって本当は持ち込んだじゃないんです。瑞穂さんもきつとこっそり持ってきたんだと思うんですけど……」

「ああそうか……輸入規制とかあったな」

「だからレアなんですけど、同じようなものを国内で作ったら売れると思いませんか？」

株式会社原島の飲食事業は大きく二つに分けられる。一つは外食部門、そしてもう一つが家庭で使用される食材全般を扱う食品部門である。食品部門の中には、農水産品の流通販売と加工品の製造も含まれている。このところ、その食品部門の数字が振るわないのだ。それを俊紀が気にかけていることに、佳乃も気がついていていた。

長引く不況の影響で、働きに出る主婦が増えた。しかもギリギリまで人員が削減されているせいで、会社での各個人の負担は増える一方。くたくたになるまで働いて帰宅すれば、家で料理を作る気力など残っていない。手っ取り早くファストフードで済ませたり、ファミレスになだれこみたくなる気持ちは十分にわかる。

佳乃や俊紀とて、もしも家にグルメシェフ山本の華麗なる食事が用意されていなければ、どんな食生活になっていたかわかったものではなかった。

「こういうフィックスのバリエーションがたくさんあれば、家でご飯作るのが簡単になって、しかも食品部門の売り上げも上がるんじゃないかなーって……」

そう言いながら俊紀の顔を見た佳乃は、ぎくりとした。俊紀があまりにも難しい顔をしていたからだ。

しまった……余計なこと言った……と、慌てて今言ったことを取り消そうとした佳乃の頭を、俊紀はぐりぐり撫でて言った。

「グッドアイデアだ！ 確かにこういう手軽なものが使えれば疲れて帰ったときでも家で料理をする気になるかもしれない。それに簡単だから一人暮らしの男とかも使いそうだ」

「そう……ですね、お弁当男子とかも増えてるみたいですし」

「そのとおりだ。早々に食品部門の企画会議にかけてみよう」

「見本とかあった方がいいですか？」

「いや、大丈夫だろう……今食べたのでイメージは掴めるし……」

「見本ならこれ使ってください」

そこに割り込んだのは朋香だった。どうやらもらったのはグレイビーソースだけではなかったらしく、鞆の中から同じようなパッケージをいくつも取り出す。元々全部佳乃に押しつけるつもりだったし……と渡してくれたものの中にはオランダーズソースやパスタソース、それから肉にまぶして

ソテーする、揚げない唐揚げ粉のようなものもあった。

「うわーラッキー!! ありがとう朋香、今度一杯奢る!!」

「一杯?」

「わかった、二杯でも三杯でも奢る! デザートも二日酔いの薬も付ける! 翌朝のみそ汁用のシジミも!」

「シジミは欲しいけど薬はいらない」

そして朋香は、じゃあまた今度「ぼったくり」にでも行こう。そのときは私、財布持っていないからね、と宣言する。「ぼったくり」とは以前朋香と呑みに行った居酒屋の名前だ。いつ聞いても敷居の高そうな名前の店である。

「了解了解、ぼったくりでもふんだくりでも任せといて!」

元氣よくそう言いながら、佳乃は、朋香がくれたフィックスをそのまま俊紀に渡す。彼は大事そうにそれを持って原島邸の方に戻っていった。早速食品部門の担当者に連絡を入れるつもりなのだろう。

これで少しでも食品部門の数字が上向けばいいな……と思いながら俊紀を見送り、佳乃はまた朋香とともに飲食に勤しんだ。

「姫さん! そろそろケバブが焼けるぜー! 仲良〜く一緒に食おうぜ!」

大澤が佳乃を呼び寄せようと大声を上げた。

既に屋敷内から戻ってきていた俊紀が『ふざけるな』とばかりに、脇腹にパンチを入れる。そして、職人ごとレンタルした臨時ケバブ屋の屋台から、できたてのドナーケバブを受け取ると、追いつがる大澤を蹴り飛ばしつつ佳乃に近付いてきた。両手に持っているところを見ると、ちゃんと朋香の分も持ってきてくれたらしい。彼は二人に一つずつケバブを渡して言った。

「ほら。お待ちかねのケバブだぞ」

「姫さん! ケバブはやっぱ、このじんわりじわじわ焼けてく肉を眺めながら食わないと!」

「うるさい!」

「そんな小うるさいボスなんざぼつといて、こつち来なつて。生ビールもあるぜー」

「お前が呑んで頭冷やせ!」

「ビールで頭が冷えるなら、ボスが一番に呑んで、そのラブラブ熱々冷やしやがれつてんだ!」

「お・お・さ・わー!!」

お互いが十数メートル離れても続行される漫才に、佳乃も朋香も息も絶え絶えになるほど笑う。終始和やか、そして時折馬鹿馬鹿しいほどの賑やかさでもって、原島邸大バーベキュー大会は無事終了した。

「姫さん、ありがとう」

朋香を見送ったあと、庭で片付けをしていた佳乃のところに、大澤がやってきて言った。

「こちらこそ、魚とか綺麗に食べていただいて助かりました」

「いや、それだけど……」

他に何かあっただろうか、と手を止めて大澤の顔を見た佳乃に、彼は少し照れくさそうな顔で言った。

「ボスをさ、昔みたいな顔で笑わせてくれてありがとう。それと、いろいろあいつを助けてくれて……。あいつ、いい奴なんだけどけっこう意固地だし偉そうだし、あれこれ大変だと思うけどよろしくな」

とつさに返す言葉が浮かばなかった佳乃を残して、大澤はじゃあな、と去っていった。

佳乃は朋香の顔を思い浮かべ、やっぱりいいなあ、幼なじみって……と思いながら、大澤を見送った。

その後、実際にドイツで大人気だというフィックスを見本に、企画会議が開かれた。水を加えて煮るだけという簡単さにもかかわらず、完成度の高い味、加えてその価格の安さに、俊紀も役員たちも食品部門の開発担当者までもが大いに驚き、即座に類似品の開発が決定された。

* * *

「よ……谷本」

株式会社原島の社長室でホワイトボードに六月後半の予定を書き込んでいた佳乃は、その声に振

り返って茶目つ気たつぷりの目で俊紀を見る。

二人の関係が変わって以来、業務を離れているときはずっと「佳乃」と呼ばれていた。

けれど、さすがに仕事をしているときにそれでは他に示しがないという佳乃の意見を受け入れて、仕事中、俊紀は佳乃を「谷本」と呼ぶ。

複写詐欺まがいとはいえ既に入籍済なわけだから、実際には谷本ではなく原島だ。佳乃もそれはわかっている。だが、二人の結婚は未だに伏せられているため、今までどおりそう呼ぶしかなかった。あの誘拐騒ぎの後、早々に発表すべきだと周りは勧めたし、俊紀もそうすべきだと言い張ったけれど、佳乃自身が断固として拒否しているのだ。

入籍した事実を発表するだけならともかく、あれほど佳乃が拒否した結婚式をやるといふのなら、式が終わるまでは入籍の事実も伏せておけ、というのが佳乃の主張である。

どうしても原島式の大結婚式をやると言い張った俊紀には、はじめをつけてもらおう。

実のところ、自分の呼び名が「谷本」であろうが、「佳乃」であろうが、はたまた「原島」であろうが、佳乃にしてみればどうでもよかった。呼ばれ方によって何が変わるわけでもない。ただ、俊紀が、「谷本」と呼ばれることに非常に不本意そうにするのがちょっと小気味いいだけだ。

特に、今のようにごく自然に「佳乃」と呼びかけて、あわてて「谷本」と呼び直す俊紀はちょっとかわいいと思う。

その上、佳乃は、二十四時間彼の管理下に置かれた私設秘書であることを盾にとって、いまだに俊紀のことを「社長」と呼び続けている。俊紀がそれにも苛立っていることはちゃんとわかっていた。

あの原島財閥総裁、原島俊紀が互いの呼び方一つで、こんなに機嫌を悪くするなんて、誰かに知られたら結構大変なんじゃない？　なんて、笑いかみ殺すのに苦労する。

何でもかんでも思いどおりってわけにはいかないつつうの。

本当に小さく呟いた佳乃の独り言を聞きとめて、俊紀が難しい顔で眺めていた報告書から目を上げた。

「何か言ったか？」

「いいえ。何か？」

最初に声をかけたのはそっちだろう、とばかりに俊紀の言葉を待ちながら、佳乃は彼の目の奥にちらりと見えた妖しげな色に少し身構える。

仕事をしている最中でも、時々俊紀はこんな風に欲望を滲ませるときがあった。

それは決まって何かやっかいな問題が持ち上がり、それを裁かねばならないとき——普段は巧妙に隠し持っている俊紀の人間的な温かみをすっぱりと切り捨てねばならないときだった。

業務上どうしても下さねばならない厳しい判断。それを強いられたとき、俊紀はその切なさを佳乃に預けたい、想いを共有してほしいという気持ちを隠しきれなくなる。

そして、今まで散々呼んできていた「谷本」という呼び名ではなく、「佳乃」という名前で呼びたくなり——恐らくは自覚もないまま、佳乃の名前を口にしかけて、慌てて訂正する。

「よ……谷本」というのは、つまりそういうことなのだと佳乃は理解している。

だから、俊紀がそんな呼び間違いをしかけたときは、少々のくすぐったさのあとで、また何かま

ずい事態が起こったのだな……と予測して身構えてしまう。

それにしても、企業トップとして背負わねばならない荷の重さを佳乃にも共有してほしいという気持ちを露わにするのは構わないし、そうやって俊紀が自分をさらけ出してくれることが嬉しいとも思うが、そこに何故欲望を滲ませるのだ。

そんなフェロモン満載な眼差しは頼むから帰宅するまでしまっておいてほしい。

もともと、俊紀は、自分がそんな目で佳乃を見ているなんて気づいていないのかもしれないけれど……

そんな思いを巡らせる佳乃の前で、俊紀は深いため息を漏らした。

「紙谷を切らねばならない」

「え……」

苦虫を噛み潰したような表情の俊紀が言ったのは、佳乃が一番聞きたくない言葉だった。

紙谷技研は、株式会社原島が取引している会社の一つである。

主に電化製品の技術開発に携わる会社で、株式会社原島の新製品開発に密接に関わっている。今は洗濯機の開発を委託していた。

その研究が若干遅れ気味になっていると聞いたのが春先。最近では、どうやら期限に間に合いそうもないという噂も流れていた。二期連続してモデルチェンジできないということは原島としては大変まずい事態だった。

「でも……あの会社はずっと……」

きつと俊紀も十分わかっている。そう思いつつも、佳乃は言わずにはいられなかった。

紙谷技研は、俊紀の父、原島孝史^{たかし}が社長だった時代から株式会社原島のいろいろな製品開発に関わってきた、付き合いの古い会社だった。

現社長の紙谷友康^{ともやす}はプライベートでも孝史と懇意で、俊紀のことも小さい頃からかわいがつてくれていた。

株式会社原島の家電部門が出したヒット商品のいくつかはこの紙谷技研の開発によるもので、長年株式会社原島に貢献してきた優良会社だ。

その紙谷技研を切り捨てるとするのは、好ましい判断ではなかった。

「わかってる。親父の代からずっと付き合いってきた会社だし、原島の融資もかなり入っている。それでも、ここまで遅れが大きくなると庇^{かば}いきれない」

「そんなに重大な事態ですか……」

「このまま行くと、またマイナーチェンジで誤魔化すことになる」

「でも、今のだってけっこう売れてるじゃないですか」

「だがあの洗濯機は発売してからもう長い。さすがに売れ行きが鈍り始める頃だ。そろそろ切り口を変えた新しい製品を売り出していかなければならない」

株式会社原島が製造販売している洗濯機は、当初の予定では昨春秋にフルモデルチェンジするはずだった。だが、紙谷技研が新技術を製品化する過程でもう随分長い間立ち止まったままになって

いて、結局昨秋はマイナーチェンジでお茶を濁すことになった。他社が新しい製品を売り出してくる中で、もしもこのまま来春も同じようなことになれば、売り上げは確実に低下するだろう。

巨大な複合企業である株式会社原島といえども、長引く不況の底にあつて、絶対に大丈夫などといえる状況ではない。この開発の遅れが、堅牢な城を崩す蟻^{あち}の一穴^{いっけつ}となる可能性もゼロではなかった。

「もうこれ以上は待てない。後継として同じような商品開発をやっているところに目星もつけてある。調べてさせてみたが、かなり有望なところだ。もし彼らがよそと提携したらうちにとっては大打撃だ。紙谷には悪いが……」

「待ってください」

たまらず佳乃は俊紀の言葉を遮^{さへぎ}った。

佳乃は紙谷技研の社員たちをよく知っていた。何度も進捗状況を確認するために足を運んだし、彼らの方から状況報告に出向いてくることもある。

忙しい俊紀に代わって、紙谷技研とのやり取りはほとんど佳乃がやってきた。彼らがいかに真剣に仕事をし、原島の新製品のために力を尽くしてきたか佳乃にはよくわかっていた。

「お前がそう言いたくなる気持ちはわかる。ずっとお前が担当してきたのだからな。それでも……」

「紙谷に行つて、状況を確認してきます」

「無駄だ。もう何度も確認に行つたし、報告も受けている。たとえ少しでも遅れを取り戻す方向に進んでいれば別だが、現状はむしろ逆だ。聞かずに遅れが大きくなっている」

「もう一度だけ！」

俊紀はしばらく黙って佳乃を見つめていた。そして、必死に追いつがる佳乃の視線に根負けしたのか、ため息をついて言った。

「月例会議の間に行つてこい。終わるまでに戻れよ」

「ありがとうございます」

そう言うなり、佳乃はバッグを掴んで社長室を飛び出した。

社用車で、もう通い慣れてしまった道を急ぐ。

問題がなければそこまで通う必要のない場所だった。それなのに、自分はこの半年でいったい何度この道を通ったことだろう。

向かうたびに、研究が少しでも進んでいることを祈り、ままならぬ現実**に**ぶつかって帰る。そんな苦い思いを何度も繰り返しながら、いつか俊紀がこんな判断を下す日が来ることを恐れていた。

確かに、温情だけではあの大企業の経営者は勤まらない。時期を見極め、切るべきときは切る。社長である俊紀にその判断ができなければ、株式会社原島は衰退の一途を辿る。

そんなことは十分わかっている。だが、それでも俊紀がそうやっていろいろなものに**おのづから**大鉈を振るう姿を見るのは辛かった。冷酷に引導を渡す陰で、どんなに俊紀が心を痛めているかを知った後では特に……

「他に方法はなかったんだろうか……」

懇意にしていた取引先や、長年勤めてきた社員を、やむなく切り捨てるとき、俊紀はいつだって

そんな風に自分を責めていた。

どう考えても会社の不利益にしかならない相手でも、もっと早くそれを止めて、会社の利益となる方向に向けられたのではないか、それができなかった自分に責任があるのだと言わんばかりに……

それは二人の関係が変わって初めて彼の口から漏れた嘆きだった。

それまでだって佳乃は、俊紀の心中にそんな思いがあることを嗅ぎ取っていた。けれど、俊紀がそれを言葉にして佳乃に伝えるようになったのは、つい最近のことである。

「言わなくてもわかってくれる相手だからこそ、言えるんだ」

俊紀は言い訳のように説明しながら、佳乃の腕の中でだけ弱音を漏らす。

その懺悔に近い呟きは、決まって、辛い決断を忘れ去ろうとするかのような激しい夜の営みの後で、ようやく佳乃が乱れ切った呼吸を取り戻す頃、ぼつりと漏らされる。

「もしかしたら、いや、きつと親父だったらもつと上手くやっていたはずだと思ふと歯がゆい」

俊紀は、その広い胸に佳乃の頭をもたせかけ、片腕でしっかりと抱き寄せる。佳乃の肌に残る熱も、興奮の証の紅色さえも逃がすまいとするようにきつく抱きしめたまま、心中を吐露する。

佳乃は俊紀の裸の胸にもたれ、その心拍をメトロノーム代わりに息を整えながら、俊紀の胸の内に耳を傾ける。そうすることで俊紀の呵責が溶けるのならば、一晩中でも彼の言葉を聞き続け、無言で抱き返し、彼を癒したいと願い続ける。

「きつと孝史様も同じように悩まれていたはずですよ」

「そうだろうか……」

「もちろんです。この判断をあなたが下すことで原島の社員とその家族の生活が保障されるんです。全てを上手く回すことなんて不可能なんですから、大多数の利益を図ることがあなたの勤めです」

だから、そんなに傷つく必要なんてありません……。あなたは十分に自分の責任を果たしています。佳乃のそんな言葉で、俊紀はようやく自分を赦し、眠りに落ちていく。

そんな俊紀の姿を見るたびに、佳乃は自分がそこにいる意味を知る。俊紀にとって唯一弱音を吐ける相手だからこそ、佳乃はここにいることを赦されているのだ。

長引く不況の中で、原島財閥を守るために俊紀が下さねばならない厳しい決断が増えている。それを間近で見ている佳乃には、俊紀の辛さが十分にわかっていた。

だからこそ、避けられるものであればたとえ一つでもその決断を避けてほしい。紙谷技研を思う気持ちと同じぐらい、今ここで紙谷技研を切らずにすれば、俊紀の辛い夜は一晩だけでも減る、という思いがあった。

自分が彼を癒すことが嫌とか、できないとかではなく、そんな思い自体を彼に味わってほしくないのだ。

それがいかに浅慮であつたか、そのときの佳乃は気づくことができなかった。

* * *

「すみません、谷本さん……」

紙谷友康はもう幾度目になったかもわからない言葉を繰り返す。

訪れる都度、聞かされる詫びの言葉は、そのたびに力を失っていった。聞きたいのは詫びではなく、改善策だと佳乃はいつも言うのだが、紙谷の口からは具体的な案が出てこない。

いったいこの会社は何が起きているのか、佳乃には理解できなかった。

少なくとも一年前にはこんなことはなかった。多少遅れを出すことはあっても、どこかでそれをきちんとカバーして、期限に間に合わせてきていた。株式会社原島の売り上げに貢献する新製品を生み出し続けてきたのに……

「紙谷さん、いったい何故？」

このままでは、会社として紙谷技研を切らねばならない。そして紙谷も、すでにそれをしっかりと認識しているに違いない。彼はあきらめたような顔をして言った。

「もういいんです。私にはこれが精いっぱいです。このままだったら続けて、御社にご迷惑をかけるよりもいいです……」

「私はそんなことを訊いてるんじゃないやありません。何故こうなったのか、その理由を訊いてるんです」原因がわからなければ対策など立てられるわけがない。今日こそはそれを聞き出す、そう決意してここに来た。理由を聞いたうえで、どうにもならないとわかれば、自分だって諦めがつくだろう。「どのみちこれで終わりだとお考えならば、いつそ腹を割って話してくださいませんか」

佳乃のそんな言葉に、紙谷はしばらく逡巡していたが、とうとう意を決したのか、口を開いた。

「実は、金がなくなりました……」

製品開発に必要な機材や資材を購入するための資金がそっくり消えた、と紙谷は言う。

元々小さな会社である。経営だっただけほぼ自転車操業に近かったし、融資に頼ってもいた。そんな状況で購入資金が消えてしまえばたちどころに影響が出る。

新しい機材購入のために株式会社原島から受けた融資がそっくりなくなった。やむを得ず古い機材で実験研究を進めてきたが、数ヶ月前にとうとうともに機能しなくなった。

研究は進めたいが実質的に進められなくなってしまったのだ、と紙谷は水をかけられた犬のような様子で語った。

「何故お金がなくなっただんです？」

まさかマネーゲームに失敗でもしたのだろうか……と思って訊いてみたが、紙谷は首を振った。「持ち逃げされました……」

それは明らかに犯罪だ。ならばその時点で何故警察に訴えなかったのか。そうすれば多少なりとも資金が取り戻せたのではないか……少なくとも、株式会社原島が紙谷技研の窮地を知ることではきたはずだ。

何故それをしなかったのだろう……と思いを巡らせて、佳乃ははつとした。

事件を表沙汰にできない理由は、犯人が身内である場合がほとんどだ。それが紙谷技研の場合に当てはまるとしたら……

「まさか……」

「そのまさかです。……賢なんです」

賢というのは紙谷の次男で、かなりの放蕩者ほうとうものだと聞いていた。

頭は悪くないのだが、とにかく怠け者でそのうえ人に騙だまされやすい。今までにも何度も危ない目に遭って、そのたびに紙谷や長男が尻ぬぐいに奔走ほんそうしていた。

それでもなんとか経営系の大学を出て紙谷技研に入社し、しばらくはそれなりに勤めていたらしいが、半年ほど前に行方をくらませた。

これまでも何度もなくなくなったことがあったので、そのときもまたか……と諦めに似た気持ちでいたのだが、その後の決算で実際にあるはずの資金が消えていることが発覚した。もしやと思って調べてみたら、帳簿が改竄かいざんされた跡が見つかったという。

もちろん犯人は賢だった。

「見つかったのですか？」

お金は、と訊くべきか、賢はと訊くべきか、迷いながら口にした言葉に、紙谷は首を横に振りながら答えた。

「本人は見つけました。でも金は……」

すっかり使ってしまったあとだった。しかも、それは遊びで作った借金の返済に使われていて、もはや取り返すことなどできなかった。

「だいぶ前から、良くない筋に借金をしていたようです。返すあてなどないままに金を借りて、結局会社の金に手を……」

我が子ながら情けない……と紙谷は声をつまらせた。

その資金で買うはずだった機材があれば、研究は順調に進み、今頃は新製品が完成していただろう。そうすれば紙谷技研は、株式会社原島から受けた融資を返してもあまりある報酬を受け取り、また新たな製品の研究開発に向かうはずだった。

それなのに、その資金を失い、当然先に受けた融資を返すあてが全くない。この上、^{ていとう}抵当が処分され、さらに原島に違約金を払うことになればもう紙谷技研が立ち直る可能性はない。

それでも、我が子を訴えることなどできない。今更それをしたところで得る物もない。

そう言って、紙谷は娘ほどの年齢の佳乃の前で声を殺して泣いた。

そんな紙谷の姿が痛々しくて、佳乃は見えていられなかった。黙って席を立ち、しばらくの間、窓の外を眺め続ける。

しばらくそうしていると、ようやく紙谷の鳴咽^{おえう}が止まった。佳乃は振り返って彼に声をかけた。

「新しい機材を買えば研究はできるのですね？」

「無理です。そんな金どこにも……」

「機材があれば、研究はできるのか、と訊いてるんです」

「谷本さん……」

「社長に掛け合います。掛け合ってその機材を手に入れます。だからなんとか……」

期限に間に合うように死にもぐるいで頑張ってほしい。原島のためにも、紙谷技研のためにも、なによりも紙谷さん自身のためにも……と、佳乃は訴える。

できない、この上そんな迷惑はかけられない、と最初は渋っていた紙谷も、あまりにも佳乃が真

剣に、諦めることなく説得を繰り返すものだから、最後にはその提案を受け入れざるを得なかった。

もしもほんの少しの可能性でも残されているならばそれにかげようと紙谷は思った。こうやって自分を信じ、真剣な眼差しで励ましてくれる佳乃のためにも……

「ありがとうございます……全力を尽くします……」

流れる涙をぐいっと拭^{ぬぐ}い、紙谷は佳乃に約束した。

必ず完成させます、間に合うよう努力します、と。

会社に戻った佳乃は、月例会議を終えて社長室に戻ったばかりの俊紀に事情を説明した。

必死の形相で、機関銃のようにまくし立てる佳乃の話を黙って聞いたあと、俊紀はただ静かに首を横に振った。

「駄目だ」

「社長！」

「最初に融資した資金が戻る見込みもないのに、さらなる貸し付けなどできない。しかも、紙谷が今までの遅れを取り戻すことは事実上不可能だ。契約満了の見込みもない、焦げ付くことがわかってる融資はできない。せいぜいできるとしたら違約金の減額ぐらいだ」

最初の資金の回収すら不可能に近い。その状況でさらに追加の融資をするなど、役員会にかけても通るわけがない、と俊紀は断言した。